
赤い芋虫

砂漠の砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い芋虫

【Nコード】

N1469Q

【作者名】

砂漠の砂

【あらすじ】

夢の中で、私と優等生のAは、フルマラソンを始めた。

（前書き）

これは、私が二年ほどまえに書き、「小説家になろう」に別の作者名で公表した作品です。当時は評判が芳しくなく、消してしまったのですが、自分では面白い作品だと思っているので、また公開することにしました。少しでも楽しんでいただければ、光栄です。

いやな夢を見た。私と、高校の同級生で勉強も運動もできて友達
はたくさんいて先生からも信頼されていて、つまり私とは対極に位
置するAとの二人が、フルマラソンをするのだ。はなから結果は分
かりきっていて、夢の中の私も内心は勝てっこないという気持ちが
ほとんどだったのだが、心のどこか隅の方ではもしかしたらという
小さな希望の泡が立ち上ってもいた。

私とAは校庭に引かれたスタートラインにたった。私に右側に並
ぶその姿は、相変わらず非の打ち所がなく、美しいという表現
も当てはまりそうなくらいだった。私の心の中は嫉妬で煮えたぎっ
た。

パン、先生がスタートの合図をピストルで知らせる。私たちは走
り出した。出だしはほぼ互角、ところが。

「あー、D君、ちょっと待って。君、フライングしたでしょ」

先生が私の後を追いかけてきて、走っている私の肩をつかんだ。

「フライングした人は最初からやり直してもらわないとだめなんだ
よね。さ、スタートラインに戻って」

何てことだ、この間にもAはどんどん前へ進んで、もう学校の校
庭から市街地に出ようとしている。先生は私をは引っ張って連れて
行き、スタートラインへ引き戻した。そこからもう一度やり直し、
先生が今度は口で、

「ヨイ、スタート」

と言う。私はえっちらおっちら走り出す。

高校の校庭を一周した後、市街地へ出るととくに姿が見えなくな
っていたAが足踏みをして待っていた。私が意外そうな顔をしてA
のきれいな顔を覗き見ると、

「どうせ学校でやってるマラソンなんだし、競争するよりは二人で
一緒に行こう」

と彼は言った。さすが優等生、言うことが違う。

Aは私のペースに合わせてゆっくり走ってくれているのだが、それでも私は息切れして肺の中で血液のスパークが起きている。この体力の差はどうしようもないので、もう勝手に先に行ってくれ、その方がこちらにも楽だ、と言おうとしたのだが、その時私の右足に何か障害物がぶつかって、前につんのめって転んでしまった。

障害物は人の足だった。Aの友達が私に足をかけたのだ。私は手とひざをすりむいて、しばらく立つこともできなかった。少し前を行っていたAは私が転んだことに気づいてか気づかずにか、走っていつてしまった。

立ち上がろうとする私に、Aの友人たちは次々に蹴りを浴びせる。肩、腹、頭、肩、かた、はら、あたま、に痛撃。かたはらあたま、かたはらいたしつ、ぶつ。

彼らはしばらくして飽きたのか、皆学校や自分たちの家の方角に戻っていった。私は血みどろになって立ち上がり、口から血と折れた歯を吐き出して、また走り出した。

曲がり角を曲がると、また優等生Aは足踏みして私のことを待っていて、振り返ると、一緒に行こう、と言った。ガードレールで仕切られた沿道には学校中の女子が並び立ち、Aに声援を送っている。

「キヤー、A君がんばれ」

「キヤー、A君ステキ」

「Dキモイ」

「A君、私のほうを見て」

「A君、私のものになって」

「Dじゃま、A君の姿が見えないじゃない」

「D死ぬ。しね、しねしねしね、ねし、ねしねしねし」

私に対する罵倒の声が時折混じるのはたぶん気のせいではない。女子高生たちもなんだか私とAを同時に視野に入れたくないみたいだし、もう先に行ってくれや、そう言おうとした時。

眉間に小石が当たって、私は地面に倒れ付した。倒れた私に、小

石はやむことなく雨あられと降り注ぐ。肩甲骨、尾てい骨、後頭部に痛烈な打撃。私は顔を無理やり横にして沿道を見た。PTAのおばさん軍団が

「学校のレヴェルが下がる。来るな」

「生ゴミ、学校へ行くな」

とか言いながらつぶてを投げてきている。Aはこの状況に気づいたのか気づかないのか、先へ行ってしまうているようだ。

おばさんたちがつぶてを投げるのに飽きて、それぞれの生息場所に戻りだすと、私は再び立ち上がった。皮が一枚むけた赤い芋虫のような姿になりながら、私はまた走り出した。Aは前方で再び足踏みして私のことを待っている。

そこでこのいやな夢は覚めた。

だから私はこのマラソンでどちらが勝ったかを知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1469q/>

赤い芋虫

2011年1月16日06時24分発行